

# Joyama

通信 Joyama News


福岡教育大学広報誌

University of Teacher Education Fukuoka Campus Magazine

vol. 37

2016 Autumn

CONTENTS

- 02 特集1
- 06 特集2
- 10 福教大NEWS 
- 14 授業紹介
  - 音楽科教育研究I(木村次宏教授)
  - 家庭科指導法(眞志倫子教授)
- 16 研究室紹介
  - 河野智文研究室
- 17 サークル紹介
  - 女子バレーボール部
  - 混声合唱団
- 18 社会連携 連載第15回
- 20 福教大卒OB・OG紹介
  - 福津市立津屋崎小学校教諭 金子 裕紀さん
  - 春日市立大谷小学校主幹教諭 井上 文美さん
- 22 TOPICS
  - 若手教員による研究成果発表会を開催しました
  - 表紙モデルの福教大生☆
- 23 キャンパスからの便り

特集1 特別座談会

## 未来の子供たちを導く、 「力のある教員」養成に向けて

特集2 自己の可能性を広げ、世界とつながる。

## カンボジア インターンシップ・ ボランティア研修



国立大学法人  
福岡教育大学



■ 黒見 義正  
学校法人滋慶文化学園  
福岡ECO動物海洋専門学校長

■ 尾崎 春樹  
学校法人目白学園  
理事長

■ 櫻井 孝俊  
福岡教育大学長

■ 後藤 靖子  
九州旅客鉄道株式会社  
常務取締役

■ 城戸 秀明  
福岡県教育委員会  
教育長

櫻井学長(中央)と経営協議会学外委員

## 今春より選修制を廃止 実践型「教職教育院」設置で 教員就職率90%を目指す

—今年度から始動した第3期中期目標・中期計画。まずは福岡教育大学(以下、福教大)の取り組みについてお聞かせください。

**櫻井** 本学は教育大学であるという特色から、優れた教員を養成し、小学校・中学校・特別支援学校へ送り出すことが不変のミッションです。それを踏まえ、第3期中期目標期間では教員養成機能における広域の拠点的作用を目指し、実践型の教員を育む「養成機能の質的転換」を図る改革を進めていきます。



平成32年度(2020年度)から教育現場へ順次導入される次期学習指導要領において、文科省は従来の知識偏重型教育から脱却し、子供たちが思考力や表現力を主体的に育むことのできるアクティブ・ラーニング(能動的学習)を重視する方針を打ち出しています。その転換に現場で対応するのは、言うまでもなく教員たちです。本学は第3期中期目標・中期計画において4つの取り組み(①教員組織改革及び実践型教員養成機能への質的転換による教員就職率の向上 ②学生ボランティア活動の推進による実践型教員の養成 ③教育委員会等と連携した九州の教育力向上に貢献する研究の推進 ④学校現場で

実践可能な英語コミュニケーション能力を身に付けた小学校教員の養成)を推進します。本日はこの4本柱を中心に有識者の皆さんと意見を交換したいと考えています。

**黒見** では、まず実践型教員を養成する質的転換について。福教大は今年度から「教職教育院」という新しい指導體制をスタートしていますが、具体的には従来とどう違う点があるのでしょうか。

**櫻井** 本学の学校教育3課程(初等・中等・特別支援教育教員養成課程)における実践型教育の徹底を目指して新設したのが教職教育院です。これまで本学は入試から修学、卒業に至るまで教科等の区分による選修制、いわゆるピーク制を実施してきました。噛み砕いていえば、数学に強い学生は数学、国語に強い学生は国語を、という専攻別の教育体制だったわけです。しかし、この方法には2つのデメリットがありました。1つは学生個人の教科別能力に差が生じやすいこと。もう1つは就職時に教員を志望する学生が極端に少ない専攻が出てしまうこと。本学は平成33年度(第3期中期目標期間末)までに教員就職率を学士・修士課程で90%、教職大学院では100%を目指しています。教職教育院の設置には今日の教育現場により求められている教員の養成と、学生たちの教員就職の夢を後押しするという2つのねらいがあるわけです。

一方で、「力のある教員を育てる」という本学の基本理念からいえば、昨今の教員離職率の増加傾向も無視できません。教員に限らず、若い世代の離職率の高さについて皆様はどう捉えていますか。

**尾崎** 本学(目白学園)には看護学部がありますが、高齢化を背景に看護師のニーズが増えている反面、やはり医療関係も非常にストレスが大きい現場なんですね。ですから、卒業後も大学に来て、悩みや相

# 特集 > 1

特別  
座談会

## 未来の子供たちを導く、 「力のある教員」養成に向けて

平成32年度(2020年度)から小学・中学・高等学校の教育現場に向けた新しい学習指導要領が導入されます。新方針では「予測困難な時代を前に自立的に生きる力を育むこと」に重点が置かれ、英語が小学校の正式教科に加えられるなど教員養成にも早急な転換が求められている状況です。福岡教育大学では今年度から第3期中期目標・中期計画を始動し、次代をけん引する教員養成の取り組みを進めています。これからの教育現場に求められる教員像、彼らを養成・輩出する福岡教育大学の使命について櫻井孝俊学長が4人の有識者と意見を交わしました。

談のアドバイス、再トレーニングが受けられるような場を設置しています。特に若い世代は現場で孤立しがちなので、そういう面からのサポートが重要ではないか、と。

**城戸** 教員離職率が増加傾向にある原因は現場が抱える問題も大きいと思いますが、教員養成という視点からいえば、人間関係をうまく築くことができる力や、最近の言葉でいうレジリエンスも必要です。教育現場で困難を乗り切るには、やはり子供や教育に対する強い使命感が前提でしょう。福教大はその点において強みがあると思います。なぜかと言えば、入学の時点で学生のほとんどが「教師になりたい」という志を持っているからです。その志を福教大が培ってきた養成技術をもって育むことができれば教員就職率は上がり、卒業生の離職率を減らせるのでは。しかし、厳しい言い方になりますが、現時点で他大学卒の教員と比べたときに福教大の卒業生が群を抜いて教育に熱い想いを持っているかといえば、もう少し感じさせて欲しい、というのが私の正直な思いです。

**尾崎** 本筋から逸れますが、今の流れから個人的な話をよろしいでしょうか。私は福教大附属小倉中学校の出身で、福教大卒の先生方に影響を受けた生徒の一人なんです。私がお世話になった先生方は素晴らしかった。例えば、理科の先生は通常許されている以上に自由に、生徒にありとあらゆる実験をさせてくれて理科の面白さを教えてくれた。夏休みに「自由研究がしたい」と

お願いしたら、学校の実験室を使えるよう取り計らってくださったり。国語の先生も授業がユニークで、教科書を離れることもしばしば。強烈な印象に残っているのはある名著を用いた漢詩の授業です。私はここで杜甫の絶句に出合ったのですが、美しい色彩の表現が10代の心にズバツと入ってきて「江は碧にして鳥はいよいよ白く、山は青くして花は燃えんと欲す…」と今でもそらんずることができる。ずっと心に残っていて、実はわが娘の名前をここから一字もらって「碧(みどり)」と名付けてしまったほどです(笑)。

当時の福教大出身の先生方は、学問を通して子供に希望や生きる



意欲を湧かせる先生がたくさんおられました。情熱的で指導力のある先生というのは、生徒たちはもちろん、きっと同僚の先生方にも大きな影響を及ぼす存在になる。いきいきとした現場が先生方をより魅力的な先生に育むこともあるのではないのでしょうか。

## 英語が小学校の正式教科へ 外国や地域、異文化で育まれる 真のコミュニケーション力とは

—次期学習指導要領では小学校5・6年生で英語が正式教科になります。福教大の取り組みにも「実践的な英語コミュニケーション能力の養成」とありますが、具体的には何をやるのでしょうか。

**櫻井** 昨年4月に在學生、また現職の義務教育諸学校教員の英語力向上を目的に「英語習得院」を設置しました。能力別にクラス分けした少人数制の講座をはじめ、短期英語研修、短期インターンシップ研修の推進などに取り組んでいます。

**城戸** 特に小学校の教員養成にあたっての英語指導は十分に実施していただきたい。九州各県あるいは政令市の教育委員会で今後その部分を重要視しない任命権者はいないはず。小学校の全教員が一定の英語運用能力を身につけるのは今後必須ですから。

**後藤** 日本の英語教育を受けた立場から経験をお話しさせてもらって、仕事で初めてアメリカに赴任したとき英語には非常に苦労しました。英語の成績は悪くない方だったので自分では英語ができるつもりだったのですが、ネイティブの発音が全く聞きとれなくて。いったい私が受けた授業、先生のあの発音は何だったんだろう、と(笑)。福教大の場合は本人の英語力に加えて、「子供に教える」という別の技術も必要ですね。教



える相手が子供なら、まずはいかに英語を好きになってもらうか。もう少し成長した生徒に対しては、英語は道具であって語るべき中身を持つていることが重要であるというコミュニケーションの本質も。どんな言語も同じですが、文法を正しく話すだけでは相手の尊敬は得られません。文化や歴史を知ろうとすること、そこから発する教養に裏うちされた自らの考えを持つことを学生のうちに気づいてもらえるといいなと思います。

**尾崎** 読む・聞く・書く・話す、このバランスからいうと日本の子供たちが特に心配されているのが、書く・話す能力です。後藤氏のご発言のように、「自分の考えがある」という前提と、それを「アウトプットする英語力」という2段階の能力が問われますから。



**黒見** 実践的な学びとしてアジア諸国の大学への短期留学もいいと思います。アジア諸国なら費用も抑えられますし、短期間でも英語を使う環境に身を置く経験をすることで英語との距離感が変わるはず。また、福岡県には東京・大阪に次ぐレベルで留学生が多いという環境もある。英語コミュニケーションに垣根をなくしていく指導を学外でも

多角的に展開できるのではないのでしょうか。

**後藤** 今は若い世代が旅行に行かないという統計が出ているんです。多様な文化に対する好奇心が薄れているのではないか、日本のソフトパワーは大丈夫なのか。異なるものと出会いや体験を通じた学びが人を育むという意味で日常の外へ出て行くことは大切だと思います。特に教育現場に携わる方々にはそういう学びも期待したい。

—生活圏の外という意味では「地域」という視点もあります。福教大に限らず、学生のボランティア活動が全国で推進されていますが、学生と地域、ボランティアについて考えをお聞かせください。

**黒見** 本学(福岡ECO動物海洋専門学校)も学生ボランティアを推進していますが、本学ならではの視点では、例えばペット飼育の啓



発活動があります。殺処分になるペットの数を何とか減らそうと動物と暮らすリスクや責任、また動物の健康管理も含めた啓発活動を福岡市など行政と連携して学生たちも取り組んでいます。

**後藤** 私は以前、山形県で副知事をしていたんですが、県内の各大学において学生ボランティアは教育の一環に近い位置付けだったと認識しています。特に地域活性化に寄与する取り組みは非常に精力的でした。例えば、古くから残る建造物を地域資源として見直し、残していく「蔵プロジェクト」。単に建物を残すだけでなく、ギャラリーやお店にしてはどうか、どんな設計にして誰に何を売ろうかなど細かいところまで学生たちが地域の方々と一緒になって取り組んでいました。こうした活動は住民の皆さんの大きな支えになっていたという意味でも存在感がありました。

**尾崎** 福教大の学生ボランティアの推進にはコミュニティ・スクールの取り組みも含まれていますよね。学校運営に保護者や地域の方々の知恵を取り入れながら協働で子供たちを育むコミュニティ・スクールは、一見、学校に向かった一方の仕組みに見えますが、実際は子供たちが地域に出て行くことで地元を元気づけるケースも多く、双方向のエネルギー交換になる。また、学生ばかりでなく、指導教員も含めて地域と交流していくことで大学の風土そのものを新しくする可能性もあると考えます。

**櫻井** 本学は第3期中期計画の中で、学士課程のボランティア活動の参加率100%達成を目標に掲げています。新しく「ボランティア認定制度」を設け、ボランティアに参加した時間、受け入れてくださった方々の評価、学生自身の自己評価をもとにボランティア活動を3段階で評価・認定するという仕組みです。

**城戸** 福教大の学生たちは教員のたまごですから、一般大学の学生以上に学生時代から社会貢献を体験的に学び、地域と関わることで人間の幅、視野を広げることの意味が大きいように思います。しかし、より深い話をするなら学生ボランティア全般においてマッチングの課題も残されていると感じます。不登校やいじめの問題に取り組んでいる組織が学生の協力を必要としているとき、それに対応し得る学生が果たしてどれだけのいるのか。需要側と供給側が噛み合うようなマッチングシステムを確立することも急がれるのではないのでしょうか。

**櫻井** たしかに受け入れ側との温度差、真のマッチングは今後の大きな課題です。現在、福岡県下にある市町村と包括的な協定を結び、その中で学生ボランティアに関しても調整を図ろうと動いているところです。現状、本学では年間のべ2000人の学生がボランティア活動に参加していますが、同じ学生が何度も参加しており、一度限りの、単なる経験に終わっていない点は自負しています。大学側としても新たにコーディネーターを配置するなど、きめ細かい対応をしながら学生たちの意欲に応えていく考えです。



## 子供たちの未来を豊かに育む 伸びしろのある教員養成 教育大学「福教大」への期待

—最後に、今後の福教大に対する期待、エールをお願いします。

**城戸** 教育現場の目線から申し上げると、やはり良い先生を養成し、学校現場へたくさん輩出していただくこと、これがいちばん有難い。昨今の教育現場は様々な悩みを抱えています。教育大学として福教大が長年醸成してきた研究機能をそうした課題解決にもっともっと役立てていただきたい。ますますの充実を期待しております。

**後藤** 良い先生が育つということは、言うまでもなく子供たちにとって大切なことですし、ひいては日本の社会全体に重要なことです。教職が日本の将来の一端を担う期待された分野であることを学生たちが自覚し、夢に向かってまい進してくれることを期待します。

**尾崎** 学士課程で90%の教員就職率という意欲的な目標をぜひ達成していただきたい。もちろん、数字ばかりを追うのでもありません。民間企業が就職試験をする際、「小手先の技術や付け焼刃は長く通用しない。その人が将来どこまで伸びるかを見抜かなくてはならない」とよく言います。教員においても同じではないでしょうか。長い教員人生で自らの情熱を鼓舞し続けられる、伸びしろのある人材をぜひ養成していただきたい。私がかつて導いていただいたような情熱ある先生方の指導は、やはり子供たちにダイレクトに届き、若い好奇心を存分に刺激するものだと思うので。子供たちに夢や希望を与えてくれる先生をぜひ輩出していただきたいと思います。

**黒見** 子供の貧困、親の所得格差の問題がいわれる中、学校教育の役割が決定的に重要になっていると思います。塾に通わなければ学力は伸びないでは困る、学校できちんと勉強すれば自立した人間になれる、志望する進路を選べる、やはりそうでなくてはならない。そのためには優秀な教員が不可欠です。より信頼の厚い教育大学を目指していただきたいと願います。

**櫻井** 本学が教育大学として社会の中で問われる機能はご指摘いただいた通り、優れた教員を養成することに尽きると 생각합니다。本日は第3期中期目標・中期計画を中心にお話しを展開しましたが、教育には長期的な展望も必要だと考えます。多くの教員は採用から40年間弱、教育現場で生きていきます。将来的にはその40年間のライフステージに沿い、学生に加え、現職教員の能力向上にも寄与していきたいという夢を私は持っています。「豊かな知を創造し、力のある教員を育てる」という本学の基本理念のもと、教育現場に求められる人材の養成、輩出に尽力して参ります。今後とも本学に熱いまなざしと叱咤激励を頂戴できれば幸いです。本日はありがとうございました。





自己の可能性を広げ、世界とつながる。

# カンボジア インターンシップ・ボランティア研修

福岡教育大学では、「グローバル社会に対応する児童生徒」を育成することができる「グローバルな視野を持った教育者」の養成、グローバル化する教育現場に対応し、英語教育の推進を担う教育者を養成するための取り組みの一環として、毎年海外への短期研修を実施しています。

今年度は、学生7名、職員1名(職員研修として参加)の計8名が、8月23日~9月3日の12日間、カンボジアでのインターンシップ・ボランティア研修に参加しました。

年度当初より、例年同様マレーシア研修を予定して事前研修を進めていましたが、6月(クアラルンプール郊外)、7月(ダッカ)と立て続けにテロ事件が発生し、研修の安全面を第一に考えて、急遽マレーシアでの研修を断念することになりました。出発の約1カ月前のことでした。その後、参加予定者にカンボジアでの研修を提示し、約半数がそちらを希望してカンボジア研修が誕生することになりました。

参加者は2グループに分かれて、アンコールワットがある観光都市シェムリアップの孤児院(だるま愛育園)及び、カンボジアで一番美しい街並みと言われるバタンバン(CMC(一般財団法人カンボジア地雷撤去キャンペーン(<http://cmc-net.jp/>))事務所、CMCが建設した学校等でのインターンシップやボランティアを交互に体験しました。また、その合間を縫って、行く先々の様々な関係者とディスカッションやインタビューを行いました。

以下、参加者の報告書より一部抜粋を紹介いたします。参加者を受け入れて下さった皆さん、お世話になった皆さんに、心より感謝いたします。オーケン!(ありがとう)

※ 今年度の英語圏での短期研修は、現在のところ春休みに予定されています。

※※ 後日、英語習得院ELIホームページにて報告書詳細を紹介する予定です。

## 【危機管理】

本学は、今年度より、海外派遣事業参加者(学生・教職員)への危機管理業務の一部外部委託を開始しました。8月出発の長短期派遣(協定留学、カンボジアインターンシップ・ボランティア研修)から適用しています。



孤児院(だるま愛育園)最終日の記念撮影



人なつこい現地の子供たち



タプロム遺跡にて参加者とCMC現地職員

現地研修での学びがより深いものとなるように、また、参加者同士のコミュニケーションをはかることを目的として実施している事前研修(今年度は計6回実施)では、現地の地理・風土、歴史・文化や、危機管理、訪問先の機関について事前にグループで下調べをし、発表を行いました。

また、現地で行うインタビューやディスカッションについて、グループ毎に計画を立案しました。





今回、8月23日から9月3日までの12日間、カンボジアにてインターンシップ研修を行いました。私にとって、今回初めての海外経験となったため、様々な不安を抱えながらの研修となりました。この研修を通して学んだことは、主に2つあります。

1つは、人とのコミュニケーションにおいて最も大切なのは、言葉の巧みさではなく相手に対する心であるということです。研修の前半は、シムリアップにあるだるま愛育園という孤児院で、子供たちに英語やパソコンの使い方を教えました。最初、子供たちにものを教える際に障害となったものが1つだけありました。それは言語です。(中略)

子供たちと実際に触れあってみると、私の英語での問いかけを理解できていない様子でした。最初はこのことにショックを受け、初日は子供たちとうまくコミュニケーションをとることができませんでした。また、孤児院での活動が終了した後、バツタンバンにて、インタビューを行う際に言葉が詰まってしまい、うまく英語が使えませんでした。このような時、なぜコミュニケーションをとれなかったのか、理由を考えてみると、それは、私自身が子供たちに心を開いていなかったからであるということに気がきました。海外という新しい環境に来たという不安な気持ち、また、他の人たちのようにうまくやらなければと焦る気持ちが、無意識のうちに周りの人々に対して心を閉じてしまっていたのです。そのため、次の日からは、自分の気持ちを伝えること、また、自分自身がなすべきことを全力でやるように心掛けました。また、自分の力だけでどうすることもできなかった場合は、仲間や周りの人の助けを借りるようにしました。

そうすることによって、子供たちや周りの人々に話しかけると、相手にも私の言いたいことが伝わり、コミュニケーションをとることができました。特に、孤児院の子供たちには、クメール語と簡単な日本語しか通じませんが、それでも、ジェスチャーを交えながらコミュニケーションをとることによって、私が言おうとすることを理解してくれました。そのため、英語でのあいさつを教えたり、スポーツを一緒にしようしたりすることを、スムーズに行うことができるようになりました。

このことから、人とのコミュニケーションにおいて必要なことは、言葉の巧拙ではなく伝えようとする姿勢、そして、真心であるのだということ学びました。

もう1つ今回の研修で学んだことは、今の生活をより良いものにしていくためには、自分自身が努力し続けなければならないということです。これは、バツタンバンでの研修の際に気付いたことです。(中略)日本ではものが足りなければすぐに買いに行き、不自由なことがあればそのことを嘆く人もいます。しかし、カンボジアの人々はとてもたくましく思えました。その根幹には、人と人とのつながりがあるのではないかと考えます。ものがあふれていない分、人々は協力をしないと生きていけません。そんな環境が人々の心を豊かにしていったのであろうと思います。

また、そのような環境は人々に生き抜くための知恵もつけさせたと思いました。不便だと思ったことでも、新しいものを手に入れようとせず、今あるものを使いこなして、今の生活をより良いものにするために、自分自身で努力していました。

今回のこの研修では、予想していなかったことがたくさん起こりました。部屋に害虫がたくさん出たり、部屋のお湯が出なくなったりとたくさんの困難にぶつかりました。しかし、それをただ嘆き、不平不満を言うのではなく、どうすればそれを取り除けるのかを、時に自分だけで、時に友達と協力し、知恵を出し合って乗り越えていきました。このことを通して、自分の生活をよくするために自分自身で努力することができ、仲間と協力し合うことで、彼らとの絆を一層深めることができました。日本にいる限りは絶対にできなかった貴重な体験でした。

これからの生活の中で、今回の研修で学んだことを大切にしながら、一日一日を有意義なものにするために、努力を続けていきたいと思います。



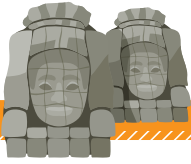
孤児院にてカルタを活用した学習サポート



孤児院にてPC操作デモ



日本の紹介



初等教育教員養成課程 英語選修 2年 <sup>みやざき みつひろ</sup> 宮崎 光彦

初日から子供たちは笑顔で私達を出迎えてくれ、子供たち同士が明るく過ごしている姿を見て、大きな「力」をもらいました。パソコンを用いて英語を学習する際も、皆真剣にそして楽しそうに学びに取り組む姿がとても印象的でした。私達日本人とカンボジア人である子供たちとは言語や文化、育ってきた環境等が異なるにもかかわらず、英語の学習と歌を通じて子供たちとここまで距離が縮まるとは思っておらず、言語は最重要なものではないということを実感しました。同時に、お互いのことをもっと知ろう、もっと仲良くなろうという気持ちがあれば、心の距離を無限に近づけることができると強く感じました。信頼関係を築いて心を尽くそうとすることで、言葉や文化の壁を超えた人同士の本当の意味での「交流」ができるということが分かりました。

子供たちとの関わりを通して、自分ができることをもっと子供たちのためにしてあげたいという思いが強くなりました。誰かのために何かをしたいという気持ちがあれば、それは相手と自分の両方を変えるチャンスであり、それを実現させようと踏み出す一歩が大事であることが分かりました。

これまでは「誰かがやってくれるだろう」「後回しでいいや」と投げやりになってしまうことも多かったのですが、カンボジアに来てからは、「今アクションを起こさないともったいない」「自分が動かないと何も変わらない」という前向きな気持ちを持つことができるようになりました。カンボジアでの子供たちとの交流が私の気持ちを大きく変えてくれました。

今回の研修での学びで終わるのではなく、日本とカンボジアをつなぐ「架け橋」になれるよう、ここでの学びを日本でもっと共有して引き続き子供たちと交流を続けていけたらと思います。また、将来教師になる者として、子供たちとの信頼関係の築き方や英語学習の進め方など、今回実体験として学んだことを今後しっかりと活かしていきたいと思っています。

初等教育教員養成課程 社会科選修 2年 <sup>あおき たつや</sup> 青木 達也

後半のたった4日を共にしただけなのに、別れが本当に惜しかったです。この短い間で子供たちの成長をみることができましたし、責任者の方の子供に対する深い愛情を感じることもできました。だるま愛育園は私のイメージしていた孤児院とは違い、あそこは間違いなく「愛育園」でした。またこの場所を訪れ、子供たちの変化を見てみたいとも思いました。

今まで生きてきた中で初めて、「夢のような時間」といえる時間を過ごせたように思います。日本に帰り、現実に戻ってから今日まで、あの時間に戻りたいという思いも強くありますが、教師を志す気持ちがさらに高まった自分がいます。この経験は、教師を目指すうえで、また教師となってからの自分にとっても、とても重要で意義のある研修になったのではないかと感じています。このような機会を頂いたことに心から感謝します。

初等教育教員養成課程 美術選修 2年 <sup>よしだ かこ</sup> 吉田 佳子

地雷被害者の人々は、手足をなくし、差別を受け、友達も逃げていったにもかかわらず今こうして笑顔でいられるのは家族の存在があったからだと言っていました。家族を守りたいという気持ちが彼らに生きる勇気を与えたのです。私はそれを聞いて、とても心が温かくなりました。そして家族というつながりの尊さを改めて感じた瞬間でもありました。

彼らは質問に真剣に答えてくれ、最後には笑ってお話をしてくださいました。その時、私は聞いたお話を自分の知識・経験とし、次世代を担う日本の子供たちに必ず伝えていこうと決心しました。

初等教育教員養成課程 教育心理学選修 2年 <sup>おほら みく</sup> 尾原 実久

研修に参加して、多くの人に出会い、話をし、一緒に楽しい時間を過ごしたことで世界に強い関心をもつことができたのが私の最も大きな変化でした。また子供はどこに行っても可愛くて大切な存在だと感じました。この研修を通して、たくさんの感動や素晴らしい出会いを経験することができたことは私の財産になりました。



小学校にて



小学校の校庭にて



地雷被害者訪問





初等教育教員養成課程 英語選修 2年 **黒木 雄大**

帰国してからというもの、私の目に映る景色は行く前とは違うものになりました。もっと、毎日を大切に生きていかなければいけないと思うようになりました。とても貴重な経験になりました。今回の渡航に際して金銭的にサポートしてくれた両親、大学職員の方々をはじめ準備に携わってくださった方々、カンボジアで出会ったすべての方々に、心の底から感謝申し上げます。

初等教育教員養成課程 国語選修 2年 **花田 大輔**

ポルポト政権による国民大量虐殺、戦争が終わった後も未回収の地雷による被害。これらは高校の世界史の教科書にも一応記載はありますし、私自身も知識はありました。しかし、机上で学ぶことと実際に行ってみるのではわけが違いました。彼らの傷はそう簡単には癒えません。それでも彼らは前向きに現実と向き合っています。バツタンバンでは多くの人々にインタビューを行う機会を得ることができ、彼らの考えは一人ひとり異なるけれども、共通しているのは過去を克服しているということでした。それゆえに悲しみの前に強さがありました。私はインタビューを通じて、日本にもカンボジアから学ぶことがたくさんあると感じました。

研修前は海外ならどこでもよいと思っていましたが、今は違います。大学2年の夏休みの2週間をカンボジアで過ごせてよかったと心から思います。

教育支援課(事務職員) **山中 啓資**

カンボジアの方にインタビューをすると、必ず自分の言葉で自信を持って答えてくれました。逆の立場のとき、私は日本のこと、将来のことについて自信を持って話せるのか考えました。おそらく彼らのように堂々とは話せないと思います。それに気付かせてもらったこの研修にはとても感謝しています。今後の課題は、日本の歴史について学びなおすことと、将来なりたい自分をイメージしてそれに向かって努力することです。

カンボジアは、今後必ず伸びていくと思います。なぜなら子供たちのパワーがすごいからです。とても勉強熱心です。子供たちは勉強できることに感謝しています。一緒に研修に参加した学生たちには、日本の子供たちがカンボジアの子供たちに負けずに、しっかり教育してもらいたいです。そのためには、私も職員として、学生それぞれの夢の実現に向けて、色々な面からサポートしていきます。



民間英語学校でのプレゼンと交流



食事は子供たちと一緒に

参加者たちは、本研修を通して、文化的背景の異なる相手を理解しようとする姿勢、問題解決能力、適応力など様々なことを実体験として学んでいます。

こうした学びが、その後の海外留学やインターンシップ、ボランティア活動など、様々な活動への動機付けに繋がることを期待するとともに、自己の体験から得た学びを、次世代を担う子どもたちに伝えてほしいと願っています。



11月8日(火)に行われた研修報告会では、司会進行を含むすべての内容が学生たちによって企画され、グループに分かれて報告がありました。各グループの参加者たちは、研修の内容や、研修先で独自に調査・考察したことをまとめ、スクリーン等を活用して分かりやすく発表しました。



## 福教大 NEWS 1 ▶ オープンキャンパス2016を開催しました

福岡教育大学では、7月23日(土)にオープンキャンパスを開催しました。今年も天候に恵まれ、朝早くからたくさんの高校生や保護者の方など、2,880人もの来場者をお迎えしました。

オープンキャンパスでは、大学説明会のほかに各専攻等の紹介や体験授業、在学生による個別相談など、多彩なイベントを学内各所で開催しました。

大学説明会では、櫻井学長の「高校生へのメッセージ」と題した講話もあり、参加された高校生や保護者の方々が、熱心に耳を傾けていました。

体験授業等では、高校生や保護者の方々に大学での学びを体験・見学していただきました。また、在学生による相談コーナーでは、談笑を交えつつ和やかな雰囲気の中、高校生からの質問に在学生が答えました。



体験授業



体験授業



体験授業



在学生による相談コーナー



大学説明会の様子

当日は、サークル活動の練習も公開しました。グラウンドや体育館での練習のほか、中庭等で歌やダンスを披露するサークルもあり、大いに盛り上がりました。



サークル活動紹介の様子

オープンキャンパスのアンケートにご協力いただいた方に、本学オリジナルグッズを配布しました。これを機に本学により親しみを抱いていただけましたら幸いです。

みなさまからお寄せいただいた意見を踏まえ、来年度以降も、さらに進化した福教大オープンキャンパスにできるよう、スタッフ一同尽力いたします。



本学オリジナルグッズ

## 福教大 NEWS 2 ▶ 福岡教育大学未来奨学金授与式を行いました

7月20日(水)に平成28年度福岡教育大学未来奨学金授与式を実施しました。

「福岡教育大学未来奨学金」は、学生の学業及び海外留学を奨励することを目的として、平成24年度に創設された本学独自の給付型奨学金です。この奨学金は「学業成績優秀者奨学金」と「国際交流協定校派遣支援奨学金」の2つがあり、今年度で、5回目の授与となります。

今年度は20名の学生が奨学金を授与されました。櫻井学長から「奨学生の皆さんには、受け取った奨学金を活用し、学校教育現場、あるいは地域社会等で指導的役割を果たし、活躍する人物となることを期待しています。」、谷同窓会副会長から「奨学生の皆さんには本学で学んだことを社会生活で役立てて欲しい。同窓会としては卒業後も支援していきます。」と激励の言葉が贈られました。

これを受け、学業成績優秀者奨学生を代表して初等教育教員養成課程国語選修3年の石川舞さんから、感謝の言葉とともに「いただいた奨学金は、教員になるという夢の実現のために活用したいと思います。」と決意が述べられました。

なお、「国際交流協定校派遣支援奨学金」については、受給予定の学生がおりましたが、「平成28年度独立行政法人日本学生支援機構海外留学支援制度(短期派遣)奨学金」及び「馬場財団国際理解教育人材養成奨学金」に採用となったため、今年度は「学業成績優秀者奨学金」のみの授与となりました。



学業成績優秀者奨学生、櫻井学長(中央左)と谷同窓会副会長(中央右)

## 福教大 NEWS 3 ▶ 九州地区教員育成指標研究協議会を開催しました

福岡教育大学は、文部科学省より「平成28年度総合的な教師力向上のための調査研究事業(テーマ3:教員育成指標等の策定のためのモデル事業)」の委託を受け、本学教育総合研究所(所長:清水紀宏副学長)を中心に「教員育成指標モデルの作成」について調査研究を進めています。

教員育成指標とは、教員がキャリアステージに応じて身につけるべき資質や能力の明確化のため、今後各都道府県等が整備していくものであり、本研究プロジェクトは、このモデルを策定することを目的としています。

本事業には、九州地区の教員養成を行う大学や教育委員会との連携・協力のもと事業を展開することにその意義・特色があり、この研究プロジェクト推進のため、福岡県教育委員会、福岡県教育センター、福岡市教育センター、北九州市立教育センター、福岡県の小学校校長会長・中学校校長会長・公立高等学校長協会会長、大学の研究者及び九州各県の教育委員会関係者による「九州地区教員育成指標研究協議会」を立ち上げ、協議を進めています。

8月4日に開催した第1回協議会では、九州地区の教育委員会関係者が一同に会し、本学の研究者を交えて教員育成指標のモデル策定についての方針や観点、運用上の課題等の見通しについて協議しました。

10月17日に開かれた第2回協議会では私立大学の研究者も加わり、また文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室室長補佐の伊野哲也氏にもご参加いただき、教員育成指標策定の動向について説明していただきました。

その後、教員育成指標のねらい、教員の資質能力の構造やキャリアステージの設定等について、教育総合研究所の礒部准教授の提案をもとに、教育行政・学校現場・研究者のそれぞれの立場から32名の参加者により活発に意見交換が行われました。

今後さらに協議を深め、九州地区全体に還元できる「教員育成指標モデル」を構築していくことを目指します。



第1回協議会の様子



第2回協議会の様子

## 第11回宗像地区教育関係者合同研修会を開催しました

8月10日(水)に、本学アカデミックホールにて「第11回宗像地区教育関係者合同研修会」を開催しました。

「福岡教育大学と宗像地区の学校との連携について」を全体テーマとし、猛暑の中、宗像市・福津市教育委員会及び学校関係者、本学関係者を合わせて約190名の参加がありました。

開会行事では、櫻井学長から「宗像地区の教育振興を図るという本研修会の目的に立ち返り、これまでの成果を踏まえ、望ましい連携の在り方やそのための課題を考えていきたい」との挨拶がありました。

第一部では、「いじめ・不登校の未然防止への取組について」と題して、福津市におけるQ-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)等を活用した取組状況、そして教員養成4大学(宮城教育大学、上越教育大学、鳴門教育大学、本学)が協働で実施している「BP(いじめ防止)プロジェクト」より、附属福岡小学校での「いじめ」防止につながる授業づくりについて、実践発表がありました。

第二部では、新たな試みとして、「大学研究シーズと学校のニーズのマッチング・ワークショップ」と題してのポスターセッションを行いました。

福岡教育大学BP(いじめ防止)プロジェクト、体験実習・教育実習、CS(コミュニティスクール)支援、防災教育、そしてQ-Uの5種類のポスターを会場内に設置し、出席者は自身の興味があるブースを訪ね、担当教員の説明を受けての質疑応答が交わされる様子が、会場内で多く見受けられました。



櫻井学長による開会挨拶



会場の様子(全体)

## 平成28年度福岡教育大学教員養成の質向上に関する諮問会議を開催しました

10月6日(木)に、平成28年度第1回教員養成の質向上に関する諮問会議を開催しました。

諮問会議は、教育委員会の幹部職員や公立の連携協力校の長等を構成員とし、教員養成に関する様々な社会の要請を踏まえたカリキュラムの検証、養成する人材像、現職教員の再教育の在り方などについて審議いただくため、平成26年度に設置したものです。

平成28年度は、「本学附属学校における教育研究及び実習の充実に向けた取組方策について」と題した諮問文が担当理事から議長へ手渡され、諮問内容の説明後、附属学校の存在意義・役割の明確化、附属学校の組織運営等に関して委員から意見や質問が相次ぎ、活発な意見交換が行われました。

今年度は、文部科学省において、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」が設立され、今後の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の在り方に関し、その審議が進められています。このような状況の中で、本諮問会議では、専門委員会で具体的な検討を行い、平成29年1月を目途に答申を取りまとめることとしています。

諮問会議の答申を踏まえ、実践型教員養成機能への質的転換等、教員養成に対する社会の要請を受けとめた改革を推進することとしています。



会議の様子



諮問文を渡す池田理事(右)

## 福教大NEWS 6 ▶ 統合移転50周年記念事業を挙りました

福岡教育大学では、10月29日(土)14時から、本学アカデミックホールに於いて、統合移転50周年記念事業として、式典、顕彰パネル除幕式及び祝賀会を挙りました。式典には、文部科学省、出光興産株式会社、公益財団法人出光美術館、県内教育界の各関係者、本学学生及び教職員など会場を埋め尽くす約260人が参列しました。

式典に先立ち、本学音楽教育講座武内俊之准教授によるピアノ演奏が行われ、武内准教授の卓越した演奏に、会場から大きな拍手が送られました。

式典では、櫻井学長が、本学にご支援、ご協力いただいた多くの方々に謝辞を述べるとともに、「本学は、第3期中期目標期間において、義務教育諸学校に関する教員養成機能における広域の拠点的作用を目指すことを基本的な目標とし、実践型教員養成機能への質的転換を図り、我が国の学校教員の質の向上に貢献するための改革を推進してまいります。」と決意を表明しました。

続いて、氷見谷直紀文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長、齋藤勝美出光興産株式会社常務取締役、城戸秀明福岡県教育委員会教育長から祝辞が披露されました。

このち、本学の統合移転におけるご支援並びに本学学生に対する奨学事業及び教職員への研究助成事業等を実施された出光興産株式会社及び統合移転に際しご尽力いただいた宗像市に対し、感謝の意を表し、櫻井学長から、感謝状の贈呈が行われました。

式典終了後、祝賀会に先立ち、音楽教育講座山中和佳子准教授及び本学学生によるフルート四重奏が行われ、フルートと弦楽器の見事に調和された演奏に会場の参列者は聴き入り、大きな拍手が送られました。その後、宗像市長の谷井博美氏からの祝辞のち、来賓と本学関係者による鏡開きと、宗像市教育委員会教育長の遠矢修氏の発声による乾杯が行われました。会場は終始和やかな雰囲気につつまれ、最後に福岡教育大学同窓会長の太田勝視氏の万歳三唱で閉会となりました。

福岡教育大学は、統合移転50周年という記念すべき節目の年に「義務教育に関する九州の教員養成拠点大学として、豊かな知を創造し、力のある教員を育てる」という本学の目標に向かって、新たな一歩を踏み出しました。



櫻井学長による挨拶



感謝状贈呈(右:櫻井学長 左:齋藤勝美出光興産株式会社常務取締役)



統合移転50周年記念顕彰パネル除幕式



谷井博美宗像市長からの祝辞(記念祝賀会)



# 音楽科教育研究I

教職教育院・音楽教育講座 教授 木村 次宏



教員プロフィール  
木村 次宏  
(きむら つぎひろ)

広島大学大学院教育学研究科教科教育専攻博士課程前期修了・後期中退(教育学修士)。専門は音楽教育学で、その原理や方法に関する研究を行っています。また現在は附属福岡中学校長を兼務しています。

## 音楽科の教員を目指す 第一歩として

音楽科教育研究Iは、これから中学校・高等学校等の音楽科の教員を目指すにあたって、その第一歩を学ぶ科目として主に中等教育教員養成課程音楽専攻の学生を対象に開講されています。本専攻に所属している学生は、大学に入る以前から現在に至るまで、自分自身の専門である音楽的な知識や技能を習得するために多くの時間を費やしてきました。しかし教師を目指すためには、それらの教科専門的な内容と共に教科教育に関する知識や技能等を身に付けていくことが必要となります。

## 授業での取り組み

この授業では、例えば「なぜ学校で音楽科を学ぶのか」「音楽科の教員に必要な資

質・力量とは」といった音楽科教育に関する基本的な課題について、教育現場の実情や教員採用試験の内容等を踏まえ話し合ったり演習を行ったりしながら学生一人一人が主体的に検討し、音楽授業を実践する際の心構えや実際の指導場面において求められる演奏技能等の基礎・基本を学んでいきます。

## 自分の夢を実現するために

小学校から高等学校まで、音楽科の授業時数は他教科等と比べて少ないのが現状です。したがって中学校や高等学校で音楽科教員となるための教員採用試験の倍率もかなり高く、狭き門となっています。1年次から少しずつ教師としての資質・力量を身に付けながら、自分の夢の実

現に向かって頑張っていきましょう。本授業もそのための一つの機会となることを期待していますし、必要な情報提供やサポートも適宜おこなっていきたく考えています。



$$A + B = C^2$$



# 家庭科指導法

教職教育院・家政教育講座 教授 貴志 倫子



教員プロフィール  
貴志 倫子  
(きし のりこ)

広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻博士後期課程修了(博士(教育学))  
専門は家庭科教育学。2005年7月本学赴任。家庭科の授業研究や教材開発に関する教育研究を行い、学校教員の研究会での助言など社会連携活動にも広く携わっている。

## 家庭科はおもしろい

家庭科は児童に人気の教科で、初めての調理経験や学習を生かした家庭実践で喜ばれたことなど、強い印象を残すようです。本授業は、初等教育教員養成課程の必修科目で、わくわく楽しい小学校家庭科の教育内容や指導法を学修する科目です。家庭生活の大切さ、時間やお金の使い方、健康によい食事、快適な着方や住まい方など、家庭科では日々の暮らしの要素を扱います。本授業では、これらの要素に含まれる生活の科学や技、文化に目を向け、家庭科教育の今日的意義や役割を考えていきます。

## 家庭科は難しい

例えば実習の授業。児童からは「楽しい」「もっとやりたい」と声が上がりますが、教師目線で見ると、事前準備に安全・衛生管理、時間配分や後片付けなど、多くの労力

がかかります。本授業で実際に調理や製作の実習を行いながら、児童に習得させたい知識や技能は何か、実習中の教師の留意点は何か、と考察していきます。「調理実習の見方が180度変わった」「大変だけど、意味ある楽しさを伝えたい」との受講生の声が聞こえてきます。

## 家庭科は奥深い

本授業終盤には、家庭科の学習指導案を作成します。同じテーマで指導案を作った者同士、3、4人のグループ内で模擬授業をしてみます。マイクロティーチングという方法です。少人数相手でも、形式だけの指導案では上手くいかないことが見えてきます。児童の思考や動き、明確な発問や準備物まで具体的にイメージした計画や、児童の生活経験

の違い、プライバシー配慮の大切さを確認し、学習指導案を改善していきます。

家庭科教育の目的は、日々の暮らしを楽しみ、自分の生活や健康は自ら守る、そんな行動力や態度をもった子どもを育てることです。家庭科の奥深さを児童に伝えられるようになって欲しいと考えています。



# かわのともふみ 教職教育院・国語教育講座 河野智文研究室

## 国語科学習指導の深さと豊かさを探究する

児童・生徒を対象とした教科としての国語科の学習指導に関する研究に取り組む学生が集まるルームです。現在、学部生15名、大学院生2名が在籍しています。着任後11年で、卒業生・修了生は48名になりました。

国語科の学習指導を構想・展開していくための具体的な方法論や、それを支える基礎理論が研究テーマとなりますが、教科教育学は実践と密着したものですから、教育実習の経験しかもたない学生たちが説得力のある研究を展開するのは容易なことではありません。

経験不足を補うのが、他者からの学びです。文献や授業記録を丁寧に分析することによって、実践を見る眼が養われ、自身のめざす理想と、自己を客観視する謙虚さが育ちます。そのことが、学生たちを「学び続ける教師」へと成長させてくれる原動力になると信じています。

卒業論文では、はじめから具体的な授業方法を取りあげることは稀で、まずは対象とする領域の目標・目的や意義、育てるべき学力とその根拠、これまでの理論・実践の史的整理などに着手します。おおよそ一年弱をかけてそうした基礎的な考察に取り組み、学部3年次末の春休みに「中間論文」としてその成果をまとめるようにしています。そこからさらに一年間をかけて、国語科教育の実践につながる論文へと

仕上げていきます。

国語科教育の理論や実践に唯一絶対の正解は存在しません。ですから、自己の主張や立場に固執せず、他者の意見に耳をかたむけ、「異論」へ自身を積極的に開いていくような謙虚さが求められます。ルームでは議論の時間を十分に確保するようにし、あわせて、国語科教育を研究している他のルームとの合同研究会も定期的を開催しています。大学院生は、九州国語学会などでの研究発表・論文投稿にも取り組み、学外の多くの方に、ご意見をいただいて研究を磨いていきます。

こうした議論は、暗く厳しくやっていたのでは気が滅入ってしまいます。互いに敬意を忘れず、明るく、なごやかに進めていくことが肝要かと思ひますし、協働性を発揮し建設的な対話のできる人こそが、今、求められているともいえます。良い意味で「お人好し」ばかりなのが、うちのルームの最大の長所なのではないかと、私は密かに思っています。

おおよそ「ことば」のない場面はありません。ことばについて、友人たちとともに、突き詰めて考え抜く経験が、みずみずしい感性とあたたかなまなざしを生涯にわたって持ち続ける起点となることを願っています。



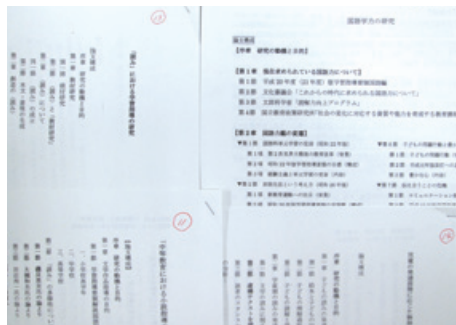
研究室集合写真



九州国語学会で口頭発表をする大学院生



ゼミの様子



研究室で定期的に行っている卒業論文中間発表会資料



研究室卒業生の卒業論文・修士論文



## 女子バレーボール部

## Volleyball Club

私たち女子バレーボール部は、プレーヤー15人、マネージャー1人の計16人で、相部保美先生のご指導のもと、日々練習に励んでいます。私たちは、「勝つこと」「結果を残すこと」を念頭に置いて、九州で1位をとることを目指しています。他の大学に比べ練習時間が少ないため、限られた時間の中で工夫して中身の濃い練習をし、上へ勝ち上がっていきけるように練習に取り組んでいます。練習では妥協をせず、勝つための厳しい環境の中で毎日頑張っています。しかし、普段は学年を越えて仲が良く、とても居心地の良い、面白い仲間です。

大会成績については、たくさんの支えのおかげで、リーグ戦で九州3位という成績を残すことができています。また、今年度の西日本インカレでは、昨年より1つ順位が上がり、ベスト16という成績を残すことができました。今年度はさらに上の順位である九州1位をとり、全国でもさらに上に進めるよう精進していきたいと思っています。

本気でバレーボールをやってみたい方は一度体育館に足を運んでみてください!私たちと一緒に上位を目指しましょう!マネージャーも大歓迎です!よろしくお祈りします!



初等教育教員養成課程保健体育選修 3年 古川 真弓子

## 混声合唱団

## Philharmonic Chorus

私たち福岡教育大学混声合唱団は、現在男女合わせて約50名の団員で活動しています。主に大学内の音楽教棟で、週に3回、和気あいあいとした雰囲気の中で練習に取り組んでいます。

毎年違ったスローガンを掲げ、合唱の練習を行いますが、今年のスローガンは「共輪(きょうわ)」です。団員同士のつながりはもちろん、合唱をしていることで出会える音楽とのつながりや、私たちの演奏を聴きにきてくださるお客さんとのつながりを大切にしたい、またそんな方たちと歌でひとつになりたいという思いを込めています。今年は長崎で行われた「九州合唱コンクール」に出場させていただき、とても素敵な音楽や合唱団の方々とお会いすることができました。他にも訪問演奏会や学内演奏会など、地元の方々や大学内の皆さんともつながることのできる演奏会も行っています。

そして、今年度は12月17日(土)に宗像ユリックスにて「第56回定期演奏会」を行います。合唱コンクールや学内演奏会で歌った曲を演奏する予定です。皆さんに耳馴染みのある曲もたくさんありますので、ご来場を心よりお待ちしております。

また、一緒に合唱をしたいという方も大歓迎しています。過半数が初心者の方の部活ですので、気軽に練習の見学に来てみてください。



特別支援教育教員養成課程視覚障害児教育専攻 3年 横田 葵

## 研究 連携

### 学校、教育委員会等との連携

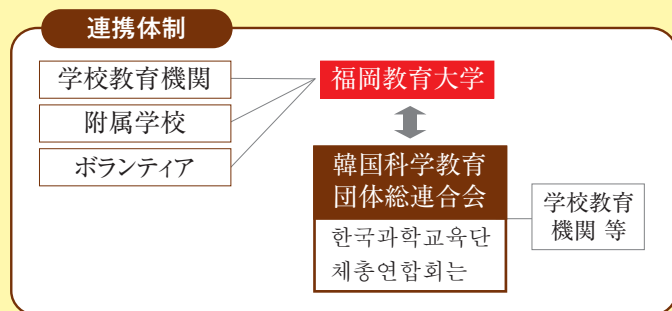
福岡教育大学では、学校、教育委員会及びその他の機関・団体との連携事業や共同研究を推進し、その成果を積極的に社会に還元します。

連載第15回 平成26-27年度 教育総合研究所研究プロジェクト  
(重点・融合領域研究部門)

## 「日・韓交流による理科教員および生徒研修プログラムの構築に関する研究」

(研究代表:教職教育院・理科教育講座 教授 坂本 憲明)

日本と韓国の科学教育関係者との持続的な連携を深めるため、福岡教育大学と地理的に近く交通アクセスも良い、隣国の韓国(ソウル市)との交流を積極的に図り、教員および生徒の研修プログラムの構築を目指しました。



日本(福岡)と韓国の地理的MAP(イメージ)

○平成26年度: 10月25日(土)~26日(日)  
韓国学生科学探究オリンピック大会(ソウル) 出展

○平成27年度: 10月17日(土)~18日(日)  
韓国学生科学探究オリンピック大会(ソウル) 出展  
主催: 韓国科学教育団体総連合会  
場所: 韓国(ソウル市)オリンピック公園  
(ソウル市松坡区芳蔭洞88番地)

※MERSコロナウイルス、国際情勢等により、生徒渡航研修は計画断念



会場風景(全景:モニュメントとブーステント)



ブーステントの様子(H27)



学生科学探究オリンピック大会 ブースの出展内容

빛의 불가사의, 보였다! 사라졌다!  
(「ふしぎ!! 消えた・見えた」)…光の全反射を利用した教材



## 福岡教育大学連携事業へのメッセージ

福岡教育大学(坂本憲明教授)が韓国科学教育団体総連合会の関係者と深い関わりを持ち、その主催行事に教員や学生を同伴して参加していることには心から感謝しています。この連合会は、韓国内の科学教育関係の全団体を総括する大きな組織であり、韓国の理科教育の実践に主要な役割を果たしています。これまで20数年間、この連合会と関わり、両国の科学教育情報の交換や人的な交わりを続けてきましたが、それがこれからも継続されていくことには、私だけでなく、韓国も強く期待しています。

福岡教育大学名誉教授 中村重太



최돈희(崔燉喜)会長

本会と福岡教育大学とご縁を結んだことは、20余年の歴史を持った科学交流行事で韓・日間の科学教育の相互理解と互いに影響を与えた優秀な行事だったといえます。今後も両国の科学発展の為に絶え間ない交流が成り立つことを期待しています。感謝です。

この20年間、福岡教育大学中村重太名誉教授の助けで韓国科学教育団体総連合会は発展を重ねて今日に至っています。また新たに坂本憲明教授とともに発展したいと思えます。ありがとうございます。



中央: 김재영(金在英)副会長(ソウル教育大学教授)  
※左は坂本憲明教授、右は堀浩二教諭

韓國 科學教育團體總聯合會 會長 최돈희(崔燉喜)

副會長 김재영(金在英)

※原文はハングルですが、邦訳したもの

下記の方々(総連合会歴代会長)にも大変お世話になりました。御礼申し上げます。

金昌埴(Kim Jam Sik)氏(国民大学校自然科学大学名誉教授)

金榮洙(Kim Young Soo)氏(元ソウル特別市議会議員(教育委員))

鄭玩鎬(Chung Wan Ho)氏(元韓国教員大学校総長)

李圭碩(Lee Kyu Suk)氏(元ソウル市教育科学研究院院長)

## 連携の声【研修報告(プロジェクト研究協力者: 報告書から一部抜粋)】

外国でのこのような交流ははじめてであったため、科学で外国の子供たちと交流するという体験をし、有意義な時間を過ごすことができた(H26)。昨年よりも韓国語を通じて、多くの子供たちと交流することができた(H27)。私自身、このイベントに参加することで、日本にはない実験を知ったり、韓国の子供たちの積極性などを感じたりすることができる良い機会となった。ぜひ、多くの人にこの経験をしてほしいと思った。

木村 有紀子(当時: 福岡教育大学初等教育教員養成課程理科選修4年、現: 岡垣町立海老津小学校教諭)

韓国国内における学生(児童、生徒)および保護者、一般を交えた科学イベントの実情を知ることができた。日本の高校生を派遣し、イベントに参加する上での具体的な課題等を探ることができた。一般向けの科学イベントであるため、出展内容が多様で、高校生が探究活動等で行っている内容をどの様に展示し実演するか、今後、その教育的な効果を含めて検討する必要がある。

徳永 聖一(福岡県立香住丘高等学校教諭(理科: 生物))

韓国の学生、大人に対して、ブースでの実験により課題提示を行った。また、多くの出展ブースの参観を通して、日本と韓国の理科教育(主に事象提示)の共通点、相違点を検討することができた。日本における同様の大会と比較すると、参観者に占める中学生・高校生の割合が高く、熱心に説明を聞いている姿が見られた。また、科学体験ブースの出展者が多様であり、中学生が運営しているブースも見られたことから、日本の中学生を運営スタッフとして帯同することで、現地の中学生との交流も含めた経験をさせることが可能となると考える(日本・韓国双方の学生にとっての学びの場となる可能性がある)。

堀 浩二(当時: 福岡教育大学附属福岡中学校主幹教諭、現: 太宰府市教育委員会)

## ボランティアスタッフの声

H26ボランティアスタッフと学生協力者

写真右から

井手上優駿さん(※)

山浦和香さん(※)

和田鈴里さん(※)

高崎純栄さん(※)

木村有紀子さん(学生協力者)

(※)当時:福岡教育大学から韓国教員大学校に留学中



今回、私はボランティアとして参加させていただきました。科学の面白さを通じて、老若男女のみならず、韓国と日本という国境をも越えて交流することができるこの事業は、初めて参加した私にとっても魅力的で、有意義な時間となりました。ある子どもから「日本に行ってみよう!」という言葉聞いた時、それだけでも、先生方と学生が日本から出展されていることの意味は大きいのではないかと感じました。

福岡教育大学 大学院 教育科学専攻

教科教育創造コース 美術教育領域 1年 山浦 和香



道徳の授業風景



算数の授業風景



大学時代の初等臨床教育学選修の仲間たちと



大学時代のサークル(音楽堂)の仲間たちと

## みなさんはどんな教師を目指していますか？

私は現在、周りの先生方の心強いサポートを受けながら5年生の担任をさせていただいています。正直、大学時代は明確な教師像を持ってぬまま過ごしていました。しかし、恩師の先生が口癖のように「子供の手と手をつなぐ教師に」と熱弁をされており、大学時代は言葉通りに受け止めていましたが、その本当の意味が教師になってようやく理解できるようになりました。教師になって子供たちや周りの先生方から学び、新たな発見をすることもたくさんあります。

## 授業で勝負！

先生の1日はあっという間に過ぎてしまいます。その中で子供たち1人1人との対話は絶対に欠かせないもの。休み時間のおしゃべりや全力の鬼ごっこで子供たちと深く関わっていきます。遊びの中で子供たちの人間関係も見えてくることが多いですよ。そして何よりも教師は授業で勝負。試行錯誤で練った授業で「今日の授業楽しかった」の一言が栄養ドリンクよりも遥かに強いパワーの源になります。教師としてのやりがいを感じる瞬間です。

## 立ち向かっていく姿勢を！

「経験こそ宝」という言葉があるように、大学時代はボランティアやアルバイト、音楽サークルなど、数多くの経験を積みました。経験の数ほどその裏には様々な問題も生まれてきます。ですが、仲間とたくさんぶつかり合う中で、話し合い、協力して解決していくからこそ本当の繋がりが生まれてくるのではないかと強く感じています。教師を目指す皆さんには是非、たくさんの事を経験し、そこから生まれてくる問題に目を背けず、強く立ち向かい乗り越えようとする姿勢を培ってほしいと思います。

教師という仕事には数えきれないほどの魅力があります。この楽しみをいつか皆さんと共有できることを心待ちにしています。



福津市立津屋崎小学校

かねこ ひろき  
教諭 金子 裕紀さん

平成27年3月

初等教育教員養成課程  
学校臨床教育学選修卒業





H27年度在籍校で企画した校内研修会の様子(教職大学院の課題演習の一環)



在籍校での「地域連携カリキュラム」の提案(教職大学院の講義の一環)



H28年3月25日福岡教育大学修了式



現任教にて学校運営協議会の企画・運営

私は、平成26・27年度の2年間、長期派遣研修員として福岡教育大学教職大学院学校運営リーダーコースで学ぶ機会をいただきました。修了して半年。主幹教諭として歩み出した私を支えているのは、教職大学院での「理論と実践の往還」を通じた深い学びと、尊敬する先生方との出会いです。

### 組織マネジメントの視点

教職大学院における高度で質の高い講義、附属学校等での様々な実習、審議を重ねた課題演習。これまでとは違った視点からの学びが新鮮で、毎日が充実していました。この2年間での自分の最大の変容は、学校を一つの組織としてとらえ、学校の重点目標達成に向けた組織マネジメント充実の観点から、教育活動の在り方を考えるようになったことです。



教職大学院での授業研究実習(附属久留米小学校)

### 主幹教諭として歩む今

教職大学院での学びを生かして組織マネジメント力を発揮し、学校運営に主体的・創造的に参画することが自分自身の大きな役割であると考えています。

そこで私は、学校長の示す重点目標「自ら人や地域にかかわり自信や意欲を高める子供の育成」の達成をめざし、今年度の経営のキーワードである4つの“つながり”(「目標」をつなぐ、「情報」をつなぐ、「よさ」をつなぐ、「地域」をつなぐ)を具現化することを目標に、日々の教育実践にあたっています。物事に迷ったときには、教職大学院での学びや御指導いただいた恩師の言葉を思い起こしながら歩む毎日です。

教職大学院は、今の私を支える故郷です。



春日市立大谷小学校

いのうえ ふみ

主幹教諭 井上文美さん

平成28年3月

福岡教育大学大学院教育学研究科  
教職実践専攻  
学校運営リーダーコース修了

# 手教員による研究成果発表会を開催しました

平成28年10月27日(木)に学生会館大集会室において「若手教員による研究成果発表会」を開催しました。

本発表会は、平成27年度大学教員活動評価で高い評価を受け、学長裁量経費から研究費の支援を受けた優秀な若手教員8名がその研究成果を発表するという趣旨で企画されたものです。

勝又隆教授(国語教育講座)、沼尻利通准教授(国語教育講座)、黒崎龍悟准教授(国際共生教育講座)、岩田耕司准教授(数学教育講座)、加藤隆之准教授(美術教育講座)、山中和佳子准教授(音楽教育講座)、河内祥子准教授(学校教育講座)、川口俊明准教授(学校教育講座)の8名が、それぞれの研究テーマについてポスター発表形式による発表を行いました。

発表会には、76名の学生・教職員が参加し、教員に質問をしたり、その他研究内容について話をしたりするなど、ポスター発表を通じて、教員と参加者が交流する姿が見られ、参加者からも「普段話をする機会があまりない先生とも話ができてよかった」「このような機会があればまた参加したい」などの感想があり、好評を得ました。

今年度も、優秀な若手教員に対して研究支援を行い、来年度、その研究成果発表会を行うこととしています。



ポスター発表の様子

## 表紙モデルの福教大生☆

今号の表紙は、今年度のカンボジアインターンシップ・ボランティア研修で、参加学生、職員、現地スタッフが、世界遺産アンコールワット遺跡を背景に記念に撮影した1枚です。

参加学生を代表して、学生広報スタッフでもある初等教育教員養成課程美術選修2年の吉田佳子さんからのメッセージを紹介します。



私にとってカンボジア研修は初めての海外経験でした。今の大学生活になんとなく物足りなさを感じていた私は自身で物事を決め、自身の目や耳で異なる言語・文化について学びたいと思いこの研修に参加することを決めました。

この研修を通して、カンボジアの生活・教育の現状を直に学ぶことができ、また、たくさんの新たな出会いがありました。この学びと出会いの機会を与えてくださった連携推進課率いる周りの皆さんに感謝し、この経験を生かして残りの大学生活を送りたいと思います。

よしだ かこ  
吉田 佳子さん  
初等教育教員養成課程  
美術選修 2年



## 同窓会 城山会

じょうやま

### 新卒・若手情報交換会報告

同窓会城山会は、10月29日(土)新卒・若手情報交換会を大学との共催で開催いたしました。出席者は約170名。今回初めて学生約40名の参加を得ることができました。

福岡県内の小学校の先生3名による実践発表は、参加者の皆様から「とても良かった」のアンケート結果でした。谷副会長の指導助言後、副理事(キャリア担当)生田淳一先生指導による小グループ交流会が行われ先輩、後輩、学生との交流が図られ有意義な会となりました。



福岡教育大学同窓会 城山会事務局  
TEL・FAX: 0940-33-2211  
e-mail: joutamakai@able.ocn.ne.jp  
URL: katumi.server-shared.com

## 後援会

### 平成28年度保護者説明会のご報告

平成28年度保護者説明会が、熊本、長崎、大分、広島の4ヶ所で開催されました。就職、履修、学生生活についての説明の後、学年毎に分かれて茶話会をしました。そこでは保護者同士の交流や情報交換などが行われ、参加者にたいへん好評でした。

来年は、佐賀、鹿児島、宮崎、山口で開催の予定です。ぜひご参加ください。



保護者説明会の様子

後援会事務局  
TEL・FAX: 0940-33-8070  
e-mail: kouenkai@eos.ocn.ne.jp

## 健康科学センター

### MESSAGE No.112 2016 秋号

今回の内容は、「感染症について」、「「なんとなく好きになれない」ってどういうこと?」、「匂い(香り)」、「ストレスマネジメントについて」、「月経トラブル」、「性感染症を予防しよう!」など盛りだくさんです。また表紙は初等美術選修の大隈南実さんのデザインです。是非手にとってご覧ください。



健康科学センターHP  
<http://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~hokenctr/index.html>

## 美術科学生による展覧会を開催します!

### 「赤馬展」(福岡教育大学3年美術科学生展)

会期:平成29年1月24日(火)~1月29日(日) 10:00~18:00

会場:宗像コリックス美術ギャラリー  
〒811-3437 福岡県宗像市久原400番地

料金:無料

福岡教育大学美術科3年生による制作発表展です。ひとり一人の専門性を生かした、美術史・美術理論、美術科教育、絵画(日本画・油彩画)、構成デザイン(平面構成・立体構成)、彫刻、工芸領域の作品を展示します。

寒い時期ですが、皆様のご来場をお待ちしております。



学生による制作風景

●お問い合わせ先: 福岡教育大学初等教育教員養成課程  
美術選修3年  
高辻(080-8581-4501)

# Joyama 通信 vol. 37



福岡教育大学  
イメージキャラクター  
フッキー

## 福岡教育大学広報誌第37号

2016年11月18日

編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学  
経営政策課

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1

TEL.0940-35-1205

FAX.0940-35-1259

e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp

ホームページ:

<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/>



携帯電話サイト



Twitter



YouTube

### 編集後記

■特集1では、特別懇談企画として、櫻井孝俊学長と本学経営協議会学外委員の有識者4名との意見交換の様子を紹介しています。本学に対する期待や、今後の教員養成・教員育成の在り方など、本学を取り巻く現状を踏まえた今後の目指すべき方向性について、様々な意見をいただきました。

特集2では、今年度実施したカンボジアインターンシップ・ボランティア研修について、参加学生の声を中心に紹介しています。

今後も本学に入学した学生のみならずそれぞれの学生生活が充実したものとなるよう、教職員一同支援いたします。

(広報編集部)

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。